

全科協ニュース

URL <http://jcs.m.kahaku.go.jp>

全国科学博物館協議会 東京都台東区上野公園 国立科学博物館 ☎110-8718 Tel.5814-9857・9858 Fax.5814-9898 平成13年3月1日発行(通巻第177号)

特集 独立行政法人化

ポスト独法化時代—「百策連環」の必要と「原点回帰」について

東京大学総合研究博物館教授 西野 嘉章

国立系博物館等の独立行政法人化の問題は、新年の省庁改編の実施にともない、その是非を問う段階から、新しい設置形態の下でのあらたな戦略の立案を考えねばならぬ段階へと至っている。もっとも、この間の経緯を振り返るに、独法化の是非を巡る公の議論など事実上なかったにも等しく、政府の意向に添うかたちでの改編案を一方的に飲まされたかたちの博物館サイドには、建設的な将来構想を纏める余裕も体力もなかったのではないかと、私などは考えている。

今般の独法化により、国内の国立系博物館等の諸施設は、設置形態の面で、ようやくヨーロッパのそれと肩を並べることになった。事実、博物館の運営のあり方について独自の考え方を持つアメリカ合衆国のそれを別にすると、ルーヴル美術館をはじめとするフランスやブリティッシュ・ミュージアムを擁するイギリスでは、国庫と独立した会計システムを有する公益法人による博物館経営がすでに常態化して久しく、数年前に日本と同様の独法化を経験したオランダでも、すでに旧「国立系」博物館の法人型経営が様々な課題を残しながらも定着し始めている。

しかし、こうした先例があるからと言って、新たに発足した日本の独立法人諸館もまた、運営面でヨーロッパ先進国の経験に倣うことができると考えるのはいささか楽天的に過ぎる。問題は、独り「設置形態」の異同に限らない。ひとことで言うなら、文化的な「体制」すなわち、博物館事業の基礎を成す全体的な枠組みが彼国と日本では違いすぎる。したがって、現在の「体制」のまま法人の裁量に博物館の運営を委ねることにしたのでは、事業の新展開はおろか、現状を維持することすら遠からず困難になることが

十分に予想されるからである。

そうした危惧に駆られ、私は昨年十一月に拙著『二十一世紀博物館』(東京大学出版会)を上梓した。近未来の博物館のあり得べき姿を仮設するのに必要となりそうな問題を、早急に整理する必要があると考えたからである。そのなかで国内の博物館の置かれている危機的な現状を総括しつつ、私がとくに力点を置いたのは「百策連環」の必要性すなわち、文化行政を推進することに関わる諸制度を包括的かつ相互連関的に運用していくことこそが、いま求められているという点である。

博物館の現状を改善するのに、博物館法や文化財保護法の抜本的な見直しが必要であるという主張は、たしかに分かり易くまた、その緊急性については私自身も同感である。しかし、それだけで事は済まない。博物館の経営と事業の根幹に関わる問題として、個人や法人からの寄付や支援を誘導するための税制改革や、学芸員の資質向上を図るための教育制度や施設の整備を法制度の改革と連動させることが行政サイドに求められるからである。

もちろん、国が博物館事業の改革に着手するだけでは充分でない。博物館事業主体にも大胆な意識改革が必要である。それは、私の見るところ、「原点への回帰」である。現在の博物館は、展覧会を中心に事業を展開させている。それだけでなく余力の乏しい学芸員は企画展の準備に忙殺されて、他のことにまで手が回らない。こうした状況が博物館の健全なあり方でないこと、また展覧会の陳腐化を招く遠因であることは自ずから明らかであり、そのためには「特別展」と称するものの回数を減らし、博物館資料の収集、保存、調査、研究という、本来的な業務への帰還を果たさ

ねばならない。企画展から常設展へ、公開陳列館から保存蓄積館への原点帰りが、なによりもまず必要なのである。

なお、私が「調査、研究」の必要性を掲げるのは、博物館がそうした活動を通じて、「モノ」を介して新しい文化的・学術的な価値の発見・形成に与ることの大切さを言いたいからである。その多くが欧米の研究成果に依存する既存の価値体系に寄りかかったかたちでの展示公開は、現在の高度情報化社会にあっては以前ほどの意義を持たなくなっている。コレクションの収集整備にしても、特別展の開催にしても、他と違うこと、オリジナルであることを評価の第一の基準とするにしくはない。

「原点への回帰」の第二は、博物館が商業的な施設でなく、非営利的な施設であることを再確認する必要があるということである。二十世紀後半の「博物館時代」は、言うならば「商業的であること」と「文化的であること」の共存共栄を追究し、「商業的な文化施設」すなわち独立採算可能な文化施設の実現を求めたかたちで推移してきた。博物館事業主体の多くが将来に不安を感じるのはまさにこの点で、独立行政法人化の是非を巡る議論の争点もそこにあった。営利追求の発想は往々にして「文化」と相容れないからである。

この問題における「原点への回帰」というのは、対価不徴収を謳う博物館法精神、さらには国際博物館協議会規約の規定に立ち返り、博物館を「公衆」(パブリック)の手に返すこと、言葉を換えるなら、観覧の対価としての入館料の徴収を止め、公の力でもって運営するという原点へ帰ることが必要であるということである。これが夢物語でないというのは、実際に有料化への誘いを繰り返し退けてきたブリティッシュ・ミュージアムのような事例が存在するからであり、また、フランスやアメリカ合衆国でも、「文化特例」を唱えることでもって、俗にいう「受益者負担論」を退け、博物館の無料開放を模索する動きが顕在化しつつあるからである。

博物館事業におけるこうした大胆な方針転換は、どれも今回の独立行政法人化政策と真正面からぶつかるものである。しかし、独法化によって新しい未来が拓けるのならともかく、具体的な将来展望のないまま徒に時間ばかりを無駄にしていたのでは、事態が悪くなる一方である。博物館にはある種の大胆な開き直りの姿勢が必要なのではないかと私は思う。博物館は、間違いなく、社会が必要とする文

化蓄積装置であり、情報発信メディアである。もし、公衆の支持が得られぬのなら、文化に対する国民の理解の乏しきの証左であると開き直るだけの強い信念なくして、世代から世代へ、五十年から百年という長いスパンで貴重な公共コレクションを受け継いで行く事業など担ってはいけないのである。

今般の独立行政法人化は博物館以外のところにおける複雑な経緯のなかから生まれたものであり、当該博物館の関係者にとっては青天の霹靂であつたらう。しかし、考えようによっては様々な問題を抱える国立博物館の現状を改革する、千載一遇のチャンスとも受け取れる。国有コレクションの流動化と再編、法人参加各館のあいだでの人員交流や機能分掌、文化財や自然財の国家データベース構築事業の推進、長年の懸案であつた修復家や標本制作者、教育系スタッフ、レジストラ、ドキュメンタリスト等のポストの充足、法人のコポーレート・アイデンティティ(ロゴ、シンボル、カラー)の採用、博物館建築家や展示デザイナー等の雇用を含む施設設備デザイン部門の共通化、一般サービス部門(ミュージアム・ショップ、レストラン・カフェ、入館料窓口)のネットワーク一元管理など、法人参加各館で共通化・共有化・一元化すべきことはいくらかもある。

独立行政法人化を設置形態の変更のみに留め、「現在の業務をそのまま引き継ぐ」と決断することは容易である。しかし、それでは国立博物館の新時代など見えようもないのである。

美術

はく製

〈各種生物〉
剝製・骨格標本・レプリカ
加工/販売/リース



有限 東洋近代美術研究所

製作所 〒272-0816 千葉県市川市本北方2-18-1 直通 ☎047-337-5678
☎047-337-5883
本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25 FAX 047-338-1978
☎047-374-1564

独立行政法人 産業技術総合研究所地質標本館

館長 豊 遙秋

はじめに

地質調査所は1882年の創設以来、地球科学に関する我国唯一の国立研究機関として日本や日本周辺域を中心に地質や地下資源、地震や火山等の地質災害、更に地球環境問題等の研究を行ってきた。地質標本館は、その研究活動を紹介し、成果を社会に普及するために、1980年8月、当時の通産省工業技術院地質調査所の附属施設として一般に公開された。また同時に地球科学を総合的に扱う博物館としての役割も果している。

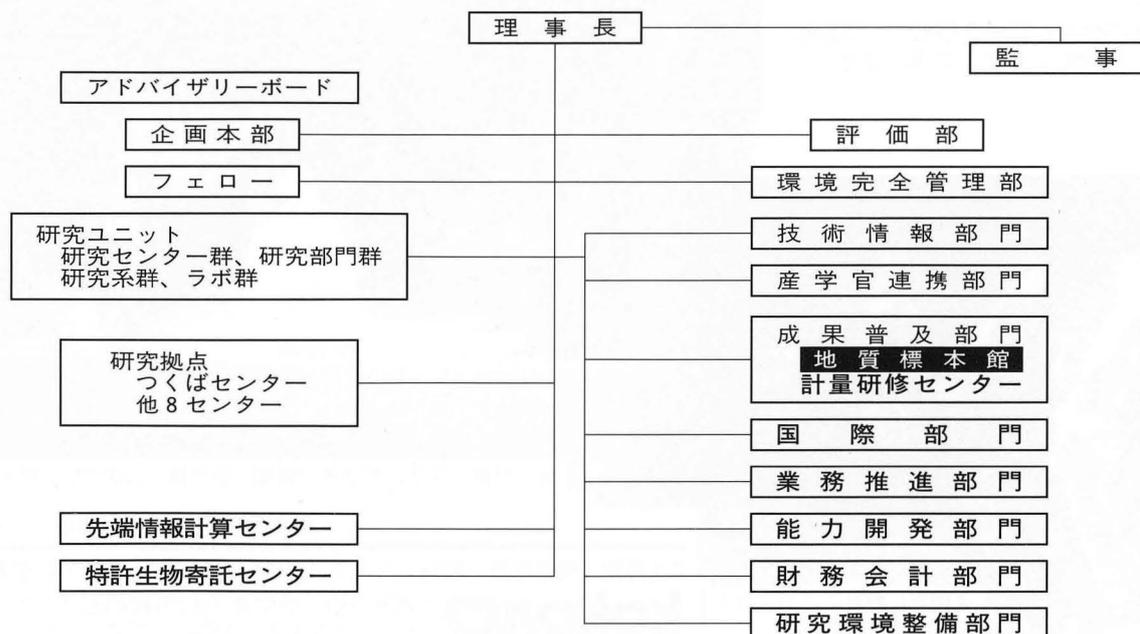
地質標本館は、その名の示す通り、約2,000点の岩石・鉱物・化石等の標本が展示の主役となり、展示室での図、写真、模型による解説をより身近かなものになっている。所蔵する標本は、それぞれ研究の裏付けのある、研究者の“血の通った”標本であり、現在収蔵庫には12万点以上の登録標本及び28万点の未登録標本が収納、管理されている。

これらの標本は、研究の検証や、新しい見地からの検討試料・標準試料として地球科学の分野のみならず化学、物理学、生物学、工学、医学、農学等、広範な分野の研究者から利用されるとともに、教育、出版、報道等の分野や全国各地の博物館や資料館にも標本を貸出し利用されている。独立行政法人化以前の地質標本館は、館長以下7名の研究

者が標本の研究を行うとともに、2名の事務官と館の運営に当り、地質調査所に所属する多くの研究者の支援を受けて、館内の展示の新設、改修、緊急展示や特別展示を企画、実施してきた。また小中学生を対象とした化石クリーニングや、レプリカ作り、普及講演等のイベントも行い、周辺地域へ貢献もしている。

独立行政法人産業技術総合研究所地質標本館の組織

2001年4月、独立行政法人産業技術総合研究所（以下産総研）は、全国に配置されている経済産業省工業技術院傘下の地質調査所を含む国立研究所15機関を母体に新たな研究機関として発足する。産総研は50余りの研究センター、研究部門、ラボ等からなる研究ユニットからなり、地質調査所が行っていた研究は、深部地質環境センター、活断層研究センター、地質情報研究部門、地圏資源環境研究部門、海洋資源環境研究部門の5ユニットに分離、継承され、創立以来地質調査所として親しまれ、知られてきた名称は消えた。尚地質調査所の英名である「Geological Survey of Japan」は変わらず、国外における代表性を保持している。一方、独立行政法人化にあたり、従来に比べて成果の発信、普及の重要性が示されており、産総研のミッションに「研究開発の実施」とともに「成果の普及」が個別法にも記載



産業技術総合研究所組織図

され、これを実施する成果普及部門の中に唯一の公開施設として地質標本館が位置づけられた。(組織図参照)

新生地質標本館は前述の5研究ユニットからなる“ヴァーチャルな地質調査所”(名称としては地質調査総合センターを用いる)の「地質の調査」に関する研究、調査の成果を普及する役割を担うことになった。

4月以後の標本館は、体勢上は整備され、4名の研究職と7名の行政職が配置され、役割分担が明瞭になった。館長の下に展示普及担当、地質標本情報担当、地質相談業務担当、試料調製担当をおく。

地質標本情報業務については、地質調査総合センターから選ばれた研究者から構成される地質標本情報化委員会が運営に関する。また展示普及業務については、同じく地質標本館展示企画委員会が組織され、館の専任職員とともに、館における展示やイベントの企画等を検討、実施することとなった。

地質標本館の業務と活動

●普及広報活動

5研究ユニット(地質調査総合センター)の行う「地質の調査」に関する研究成果の普及・広報活動を行う。活動は常

設展示の新設・改修、特別展示、緊急展示等の実施、色々な階層に対する普及講演会や野外観察会を行う。またこれまでも学校の休暇期間に行い好評であった化石のクリーニング、化石のレプリカ作り、標本に関する「地質何でも相談」等のイベントも計画、実施する。

●地質標本の管理と利用

岩石、鉱物、化石等の地質標本について研究実施部門の地質標本研究グループと連携して、地質標本データベース化を推進し、地質標本館がその管理に当る。これらの標本は研究ばかりでなく、教育・出版等のニーズに対応して、これまで維持するにとどまっていた地質標本管理用データベースを新たに整備し、画像情報とともにインターネット上に公開(電子標本館の開設)する。

登録標本については標準標本化を進めるとともに、長期的には東アジアにおける中核的標準標本センターを目指す。

尚、標本の利用については地質標本館、地質標本情報の担当者が対応する。

●地質相談

従来、地質調査所の産学官連携推進センターの「地質相談所」として暮らしの中や社会生活の中での地質に関する

歴史体感

ロボットが誘う、歴史伝説の世界

伝統文化の保存と伝承を目的とした施設、建設にも積極的に参加しております。



◀閃光に驚き、バランスを失う武士たち。



▲刀が振り下ろされるその瞬間、目が眩むばかりの閃光が走る。

佐渡歴史伝説館/日蓮聖人 佐渡法難

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・設計・制御演出・施工

kokoro
株式会社ココロ

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号
TEL: 042-530-3939 FAX: 042-530-4050
<http://www.kokoro-dreams.co.jp/>

様々な疑問や、相談に答えてきた業務を地質標本館が窓口として引き継ぐ。

●地質図類の販売

これまで限られた所でしか購入できなかった地質図類や報告書等が、標本館ロビーに新設するミュージアムショップで直接購入することが可能となる。標本館独自の絵葉書や教育用ポスター等の販売も計画している。

●地質の調査に関する試料の調製

地質調査所地質標本館が行っていた試料調製課の業務を継承するもので、「地質の調査」の研究遂行上必要な薄片・

研磨片等の作成を行う。

おわりに

産業技術総合研究所として、成果の発信普及が強く求められる中で、唯一の公開施設である地質標本館は、これ迄以上にその役割が重視され、期待も大きい。我国で唯一の地球科学に関する総合博物館として、且つ、最大の地質標本コレクションを維持する標本センターとして、この分野の博物館や資料館とともに、地球科学への貢献と、この分野に興味を持つ人々のすそ野を広げるよう努力を続けたい。

国立科学博物館のエイジェンシー化

国立科学博物館総務部長 小川 清四郎

1. 独立行政法人の概要

(1) 独立法人化への経緯

橋本内閣当時に推進された6つの改革のうちの1つである行政改革は、規制緩和、地方や民間への業務・権限の委譲を行い、行政をスリム化し、真に国家、国民に必要な行政機能を見極め、国民が求めるサービスを最小の費用で提供できる行政、経済社会の変化に柔軟に対応できる行政を作り上げるのが目的であった。行政改革を行うために、平成8年11月に内閣総理大臣を会長とする行政改革会議（以下、行革会議という）が設置された。行革会議において、21世紀における国家機能の在り方、それを踏まえた中央省庁の再編の在り方、官邸機能の強化のための具体的方策について検討を進め、2001年1月に新体制への移行を開始することを目指した。

行革会議は、平成9年3月5日に政府機関のうち企画立案部門以外の執行部門や現業をエイジェンシー化や民営化する方向で検討された。その後、平成9年5月1日の行革会議において、博物館、国立大学等の独立行政法人化が中間整理として提示された。同年12月に最終報告が取りまとめられ、公表された。そのなかには独立行政法人制度を創設し、国立科学博物館等をその対象とする旨の内容が盛り込まれた。その報告に基づいて10年6月に中央省庁等改革基本法が成立した。さらにその基本法に基づいて設置された中央省庁等改革推進本部の検討を踏まえ、独立行政法人制度は平成11年4月27日の中央省庁等改革関連法案の閣議

決定を経て国会に提出された。関連法案のなかの独立行政法人通則法にて独立行政法人が規定されている。そのおもな特徴は、法人の役員は主務大臣が任命すること、大臣が法人の達成すべき中期目標を策定すること、第三者機関が法人の業績評価を行うことである。

(2) 独立行政法人の特徴及び基本的な仕組み

①独立行政法人の基本的な考え方

これまでよりも柔軟な仕事のやり方で、質の高い行政サービスを提供するということである。現在、国が自ら提供している行政サービス、たとえば、絵画などの芸術作品の展示は、文部科学省の一部である国立美術館や国立博物館が行っている。このような仕事をこれまでよりも柔軟に行えるようにして質の高い行政サービスを提供するために、独立させた組織が独立行政法人である。

②各法人の目的・任務を達成するための基準

主務大臣による監督関与を基本的なものに限定すること、法人の独立性とインセンティブを可能な限り保障すること。効率的な仕事への意欲を高めることが重要である。

③独立行政法人になると何が変わるのか

柔軟性に富んだ運営をすることが可能になり、よりよいサービスが提供できるようになる。

④業務の評価について

業務の評価については成果の達成を重視することになる。従来は事前チェックが厳しかったが、独立行政法人の事業では、毎年、そして3年から5年ごと外部からのチェック

が行われることになる。そのための評価委員会が文部科学省に設置される。

⑤独立行政法人の仕事と国との仕分

国は「企画」担当であり、法律、基本的な計画を行う。独立行政法人は法律に基づき研究開発やサービスを提供するなどの「実施」の仕事に分けられる。

⑥独立行政法人化の規模

国は検査、研究開発、サービス業務など89の業務について独立行政法人化することを決定した。この業務にかかわっている人は約7万人で国家公務員全体(郵便局は除く。)の8分の1にあたる。

⑦実際の運営

大臣から「中期目標」が示され、この目標を達成するために独立行政法人が「中期計画」を策定し、大臣に許可を受ける。「中期目標」には業務運営の効率化やサービスの質の向上、財務運営の改善などについて目標が掲げられる。独立行政法人は「中期計画」に従い業務を行い、計画が終了するときに外部の専門家からなる評価委員会により評価されることになる。

⑧評価

しっかりと業務を行っているのか厳しい第三者評価委員会により評価され、その結果、法人は運営方法の改善などについて評価委員会から指摘されることになる。

⑨企業会計的な手法の導入

独立行政法人は、企業会計的な会計制度を導入し、貸借対照表や損益計算書などを作成し、公表しなくてはならない。どのくらいの資産を持っていて、どれだけ収益や費用があったのかなどの財務状況が明らかになる。

⑩職員の身分

国家公務員の身分と国家公務員の身分でないものがあるが、国立科学博物館は、国家公務員の身分を有することになる。給与やボーナスは仕事の実績なども評価して、法人の判断で支払われる。仕事ぶりが第三者によって評価されることになる。

⑪採算性のとばしい独立行政法人

認可された中期計画に必要な事業経費は国が保障することになる。

2. 独立行政法人国立科学博物館の概要

(1) 国立科学博物館の概要

名称は「独立行政法人国立科学博物館」となる。法人の

目的は「自然科学及び社会教育の振興」である。業務範囲は、博物館の設置、自然科学等に関する調査研究、自然科学等に関する資料の収集、保管、公衆への供覧ならびに関連する教育及び普及の事業、博物館の職員に対する研修ならびに援助及び助言、自然史研究の指導、連絡及び促進である。役員としては館長(理事長)、監事を必ず置き、理事は置くことができるとなっている。現職員は国の機関から独立行政法人にそのまま身分が引き継がれる。給与、勤務時間等は法人により決められる。

(2) 中期目標・評価の策定にあたっての留意点

中期目標の期間は、自然史科学の研究など成果を出すために長時間を有すものが多いことから、5年間としている。

業務運営の効率化のために、組織の柔軟化、運営の効率化、人員管理の適性化、情報の共有化、施設の有効利用等に留意する。

サービスの質の向上に関する事項については、博物館の整備・公開についての記述、新館Ⅱ期の整備、来館者のサービス、開館時間の延長、児童生徒に関する無料入館等を考慮すること。また自然科学に関する資料の蓄積と公開、自然科学などの研究の推進と充実を図り、研究資源の重点的配分や各種競争的研究制度の活用について配慮する。さらに科学教育の充実、研修授業の充実、研修プログラムの充実を目指し、ナショナルセンターとしての充実を図ること。財務内容に関する民間からの財務収入などの確保、手数料などの収入源の確保に努めることなど、文部科学省の「独立行政法人国立科学博物館の中期目標・評価等のあり方に関する懇談会」から中期目標のあり方について中間まとめがなされた。

(3) 今後の役割

わが国を代表する総合科学系博物館である国立科学博物館は、学術研究を推進する国立の科学系博物館として、また、社会教育の振興を通じて生涯学習の推進に寄与する知的サービス機関として、先導的及び中核的拠点としての役割と機能を果たしていくべきである。そこで、生涯学習の推進に寄与する博物館として、青少年をはじめとした国民各層の科学に関する知的欲求に応えるため、研究部門との連携を図りながら博物館の特徴を生かした学習機会を提供していく。また学術研究を推進する博物館として、自然科学等に関する研究を推進するとともに、その成果及び貴重な資産である標本資料を未来の人々へ継承していくことが

重要である。

(4) 独立行政法人化へ向けての準備状況

文部科学省における中期目標等のあり方についての中間まとめを受け、文部科学省では中期目標の作成、国立科学博物館では中期計画の作成に向けての準備を行うとともに、独立行政法人化へ向けて次のような作業を行っている。

文部科学省としては、独立行政法人法及び個別法等の移行に係る省令の準備、税制の改正、中期期間にかかわる予算の概算要求作業、独立行政法人評価委員会の設置などの準備が進められている。

また国立科学博物館としては、外部資金導入のための新たな制度の構築、勤務時間等の人事関係制度の整備、会計制度の制定、企業会計導入へ向けての取組み、内部組織の見直しなどが順次進められている。

3. 独立行政法人国立科学博物館マネジメント私考

博物館を取り巻く社会状況は大きな変化を生じている。近年、我が国の社会における21世紀初頭の社会状況については次のようなことが予想されている。

①流動的、複雑化した不透明な時代、②地球規模での協調・共生と一方では国際競争力の強化が求められる時代、③少子高齢化が進行し、生産年齢人口が減少すると同時に、産業構造や雇用形態が大きく変化すること、④職業人をはじめとする再学習、生涯学習意欲がますます増大すること、⑤豊かな未来を拓く学術研究の進歩の加速と一層の学際化、総合性の必要が生ずること、⑥さらに、産業や雇用の空洞化、少子高齢化による経済成長力の低下、高齢化に伴う社会保障給付の増大など、当面は厳しい財政状況が続くものと思われる。

このような社会状況の中で博物館も影響を受けている。平成10年度における日本全体の博物館入館者数は、2億8千64万人となっており平成7年度に比べ、535万人の減少となっている。これはそれぞれの博物館が個々に入館者増を図ることも重要であるが、お互い協力しあい日本全体の博物館の入館者の増員を図ることが必要ではないか、いわゆる日本のどこの博物館にいても素晴らしい魅力ある展示等の事業をおこなっているという評価を得ることではないだろうか。国立科学博物館がこのような機能・役割を効果的に果たすためには、そのマネジメントをどのように考えるかが重要である。

国立科学博物館では新たに展示面積の拡充、新館II期工

事の完成を計画中であり、さらに、ナショナルセンターを目指して平成13年度科学研究費補助金特定領域(A)を申請中である。また、国立科学博物館の豊富な学習資源を使い実物標本資料などのデジタルコンテンツを作成し、学校、公民館、図書館、家庭、野外などで科学・理科教育に役立てる国立科学博物館バーチャルミュージアム推進事業(平成13年度概算要求)も計画している。そのうえで以下の諸点を考慮して業務をすすめる必要があるだろう。

①青少年をはじめとして国民各層との接点において、「博物館に来てよかった」と満足して喜んでもらうこと、さらに「わかったけれど再度来館してもっと知りたい」というステップアップをしたくなるなど、さまざまな形で国立科学博物館が発信する情報に触れ、満足して喜ばれ、自己の知的水準のアップに目覚めてもらうことが重要でありかつ事業の基本になること。

②標本資料の収集、調査研究、保存活動は、それ自体も最も重要な活動であるが、活動そのものが社会・国民の学習機会のリソースになっていること。

③国立科学博物館が、さらなる資源の有効利用を考えた場合、調査研究(自然史・理工)・展示・教育普及活動の博物館活動これらの活動が連動していることにより、どの博物館よりも先進的で、創造的な活動を実現できると考えること。

④国立科学博物館がどのような機能・役割を果たすのか館内外に明確に示し、職員が共通理解のもとに館の運営にあたることがその前提となるが、その際、国立科学博物館の有する資源である人や施設や設備だけでなく、これまで築いてきたブランド、ノウハウ、信頼など目に見えないものも大切な資源であることを十分に認識し、これら蓄積された知的財産を守り、最大限に活用することが重要であること。

⑤これから世の中はどのように変わるのか、科学系博物館はどのように変化するのか、利用者は何を求めているのか、どんな技術がつかえるのか、これらの変化に対応するための資源もっているのか、などつねに問題意識をもち、その環境や要因などの分析を行うことが重要であること。

⑥進むべき方向と目標を定めて、ナショナルセンターとしての国立科学博物館のブランドイメージを汚さないことに留意しつつも、さらなる発展を目指すためには、柔軟な組織行動の実現、コスト重視の運営による効率化の実現、利用者重視の施策によるサービスの向上の実現、戦略的な広報の実現等の企業経営的発想と手法による運営が考えられる。

海 外 ニ ュ ー ス

安井亮・桜美林大学国際学部講師(博物館学)

英国立鉄道博物館、ビクトリア女王の専用客車の保存修復に、5万ポンド以上のカンパを訴える

イギリスの国立科学産業博物館機構(本部:ロンドン科学博物館)の一つである国立鉄道博物館(ヨーク市)は、このほど同館で収蔵しているビクトリア女王の専用客車の保存修復をすることになり、そのための費用として5万ポンド以上のカンパを広く世間に訴えた。鉄道による旅行をこよなく愛したビクトリア女王(1837-1901年在位)であるが、昇天した1901年の前年まで愛用していたこの客車は、女王の家族のための居間以外に、二つのベッドがある寢室、専用のトイレ、女官と召使いのための部屋を備えた豪華な特注品だった。1902年にこの客車が現役を引退してから、長い間イギリスの国有鉄道の車庫で眠った後に、同館に移って常設展示されていた。

米フィールド博物館、6,000万ドルの改築計画を発表

このほど、フィールド博物館(シカゴ)の最高経営執行者であるジョン・マッカーター氏は、6,000万ドルの改築計画を発表し、近タイリノイ州にその助成をはたらきかけるとのことだ。計画では、1,000万ドルを、館の東側に入口(現状では、館の西・南・北に入口がある)を新設、そして5,000万ドルを、新しい収蔵施設(約17,000㎡)建設にあてるようだ。1893年に設立された同館には、93ヶ国から収集された約2,100万点の収蔵品があり、年々増加するその数に対応すべく、今回の拡張計画に至ったのである。ダニエル・バーンハムによって設計された本館の建物自体の外観は、入口の新設以外は手をつけず、新しい収蔵施設を地下階に設けることになっている。

米フランクリン科学博物館、スポーツの常設展をオープン

シドニーで開かれた五輪にあわせて、フランクリン科学博物館(ペンシルバニア州フィラデルフィア)で、『ザ・スポーツ・チャレンジ』と題した常設展が2000年11月にオープンした。スバル自動車などがスポンサーとなって完成した約550㎡の展示スペースでは、アメリカの青少年の間で人気があるスポーツを使って、物理学、心理学と最先端技術を使った材料工学の科学がわかりやすく紹介されている。野球、バスケットボール、アメリカン・フットボール、テニス、サーフィン等が個別に12のコーナーに分かれ、それぞれに体験型の展示装置が設けられている。例えば、「Wider

is Better」のコーナーでは、機械によって様々な角度へ動くサーフィン・ボードに乗って、体の平衡感覚を試し、そして混んでいなければ、十分にその感覚を磨くことができる。「Take a Leap」のコーナーでは、バスケットボールで必要とされる垂直跳びの高さをコンピュータで測ってくれ、そして腕を使うことによってより高く跳べることも教えてくれる。「Go Speed Racer!」のコーナーでは、用意された一般的な車椅子と、トラック競技で使われる特別仕様の車椅子を使って、その速さの違いを体験できる。この常設展では、バーチャル・ゲームも用意されており、野球の打球の距離を競うゲームや、からだの姿勢を変えることによってスキーの滑走を速くするゲームなどが体験できる。なお現地時間の午前9時半から午後5時までの開館時間内で、この常設展で遊ぶ観覧者の様子を写した映像が、同館の特設ホームページ(<http://www.fi.edu/tfi/exhibits/sportscam.html>)で紹介されている。映像は、会場内のロックウォールに登る様子やサーフボードに乗る様子を、40分ごとに自動的にデジカメでとらえたものが提供されている。

米MIT博物館、ロボットの常設展をオープン

マサチューセッツ工科大学の大学博物館であるMIT博物館で、現在最先端のロボット技術と人工知能の開発の最新の成果を紹介する常設展をこのほどオープンした。紹介されているロボットは、触覚センサーや視覚センサーによって周囲の状況をデジタル的に解析する「Cog」や、人の声に反応して喜怒哀楽のジェスチャーを表現する「Kismet」がある他、人間の身体表現に似せた動きを示す様々なロボットも多く紹介されている。“Robots and Beyond: Exploring Artificial Intelligence at MIT”

米スカイトレック科学館、廃館の危機に

クリントン政権下で空前の好景気が続いていたアメリカではあるが、2000年秋から景気に翳りを見せ始め、中央銀行である米連邦準備制度理事会(FRB)も金利を引き下げる様子だ。経営の効率化のために大々的なリストラや、倒産に追い込まれた企業は後を絶たない。博物館も例外ではなさそうだ。ジョージア州の州都アトランタに、1988年に開館したスカイトレック(年間入館者:25万人、延べ面積:8,000㎡)は、2000年秋に経営難に陥り、年末には42人

の職員への給与も払えないでいた。SciTrek

米オレゴン州の自然史博物館、経営難により廃館

パシフィック・ノースウェスト自然史博物館は、1983年にオレゴン州アッシュランドに設立され、非営利組織として運営されてきた小規模の博物館だった。市民に愛されていたにもかかわらず、経営難によりこのほど廃館した。同館は好景気が続いていたここ数年の間に過剰な設備投資をしつづけ、入館者数の伸び悩みで、十分な収益が確保できないまま、とうとう倒産してしまった。収蔵品の大部分は、地元にあるサザーン・オレゴン大学の脊椎自然史博物館に引き取られたが、非公開である同館は今後これらを公開するかどうかを決めていない。

ウィット博物館、『アトムズ・ファミリー』展をオープン

テキサス州サンアントニオにあるウィット博物館で、2001年1月27日より、原子力エネルギーの利用について紹介した特別展をオープンした。『アトムズ・ファミリー』と題した同展は、怪物が主人公である人気テレビ番組の『アダムズ・ファミリー』をもじっており、吸血鬼ドラキュラ、フランケンシュタイン、ミイラ男、オオカミ男などのお馴染みの怪物達が展示の中でゾロゾロ登場する。サンアントニオはメキシコ系住民が市の人口の半分を占めていることもあって、同館ははじめての試みとして、この特別展の解説文を英語とスペイン語の両方で併記した。

米ザ・テックで、映画『2001年宇宙の旅』を題材にした企画展が、2001年2月にオープン

シリコンバレーにあるザ・テック (The Tech Museum of Innovation) で、SF映画ファンだったら誰でも知っている映画『2001年宇宙の旅』(スタンレー・キューブリック監督・アーサー・クラーク原作・1964年制作) を題材にしたユニークな企画展が、2001年2月9日から9月3日まで開催することになっている。同展では、この映画が完成した1964年当時に描かれた未来の宇宙探検観と、現在の宇宙探検の現状が対比された内容になっており、この映画がその後の宇宙開発の世界で多くの科学技術を生む創造力の源泉だったことで、キューブリックとクラークの先見性に光をあてている。映画に使われた多くの小道具やスチール写真、宇宙船の模型の設計図なども紹介されることになっている。
“2001: Destination Space”

米ニューハンプシャー州の科学館に、生きたクマの飼育展示施設がオープン

ユニークなことを数多くてがけるアメリカの科学館ではあるが、生きた生物を常設展示で公開するところはまだ数が少ない。ましてやクマの飼育機能をもった展示施設は今まで手がけた館はない。しかしこのほどニューハンプシャー州ホルダーネスにあるスクアーム湖自然科学館では、屋外の飼育場(約1,400㎡)と2階建ての飼育小屋(130㎡)からなるアメリカクロクマ(Ursus americanus)の生態展示コーナーを設けた。飼育小屋に併設された展示館の中で、観覧者はガラス越しに2頭のクマの生態を間近にみることができる。

ニューヨークに摩天楼博物館が開館へ

摩天楼の都ニューヨークに、摩天楼博物館(The Skyscraper Museum)が2001年10月に本格開館する。1996年に、ニューヨークが誇る摩天楼の歴史を研究するための非営利団体として発足した同館は、本格開館後、20世紀建築のチャンピオンであるニューヨークの摩天楼を、模型や建築家の功罪を取り上げて概観することになっている。歴史に埋もれた無名の労働者たちにも光をあて、建設作業員やエレベータの操作係らの仕事と生活も常設展示で紹介されることになっている。本格開館に先立ち、1997年から、同館は金融街として知られるウォール街の数ヶ所(空き屋となっている古い銀行の建物)で、精力的な展覧会活動を展開してきた。「Downtown New York」(1997.4-12)は、ニューヨークの都市形成の移り変わりを紹介し、「Building the Empire State」(1998.10-1999.9)では、エンパイア・ステート・ビルディングの建設の記録が紹介された。また「Big Buildings」(1999.10-1999.12)では、マレーシアで1999年3月に開館したペトロサイエンス科学館(参照:『世界の企業博物館』トータルメディア開発研究所・2000年5月発行)が設けられている世界で最も高いペトロナス・ツインを含む世界の高層ビルを紹介した。現在開催中の「Design Development: Times Square」は、マンハッタン島の有名な繁華街であるタイムズ・スクエアの町づくりを都市開発の視点から紹介したものだ。本格開館する施設は、現在マンハッタン島の南端に建築中の最高級ホテル「リッツ・カールトン・ダウントウン」の建物の一角にできる。このホテルに泊まる機会があったら(!)、摩天楼博物館への見学を是非お勧めしたい。

* (やすい・りょう) E-post:RGYasui@obirin.ac.jp

3月4月の特別展

- 札幌市青少年科学館** 3月10日～4月15日
春の特別展「それいけ音の正体つきとめ隊」
3月24日～4月8日
- 秋田県立博物館**
「おもしろ博物誌III」 12月2日～4月8日
- 秋田県立農業科学館**
フォトコンテスト作品展 3月6日～3月20日
- ミュージアムパーク茨城県自然博物館**
第21回企画展「とぶ・飛ぶ・翔ぶ—高さと広さを求めた動物たち—」 3月17日～6月17日
- 栃木県立博物館**
特別企画「室町・江戸の屏風絵—当館コレクションの軌跡—」
4月14日～6月17日
- 群馬県立自然史博物館**
特別展「君も博物学者」 3月17日～5月13日
- 浦和市青少年科学館**
浦和市青少年科学館年間活動展 3月19日～4月9日
- 埼玉県立自然史博物館**
企画展「化石の世界」 12月23日～6月10日
- 千葉県立中央博物館**
企画展「縄文人の食生活」 3月3日～4月8日
企画展「房総の植物を調べる—博物館のしごと—」
4月21日～6月3日
生態園トピックス展「青葉の森のタヌキ」1月30日～4月20日
生態園トピックス展「少なくなった鳥たち」
4月10日～7月1日
- 鴨川シーワールド**
シャチとジャンプで30年「シャチのいる海、バンクーバーの自然」
12月24日～4月8日
- 科学技術館**
春の特別展「サイエンス・カーニバル2001」
3月24日～4月8日
- 通信総合博物館**
第50回年賀状版画・絵手紙コンクール展 3月1日～11日
第24回「手作りの絵はがき」コンクール入賞作品展
4月7日～11日
第51回全日本切手展2001 4月14日～20日
切手クラフト展 4月21日～22日
- 交通博物館**
特別展示「のりものプリペイドカード」展
2月6日～5月13日
- 国立科学博物館**
特別企画展「情報世紀」の主役たち。 3月6日～6月3日
- たばこと塩の博物館**
企画展「よく遊び・よく学べ 浮世絵の子どもたち」
- NHK スタジオパーク**
「土木写真展～技術造形家の仕事を訪ねて～」3月16日～25日
「NHK 春の新番組」展 3月27日～4月8日
「芸能人々々の多芸」展 4月10日～15日
- 府中市郷土の森博物館**
「2000ワイルドライフ写真大賞展」 1月13日～3月18日
特別展「甲州街道府中宿再訪」 3月24日～5月6日
- 神奈川県立青少年センター**
特別展「宇宙との出会い」 2月24日～4月8日
- 馬の博物館**
テーマ展「馬の張子玩具」 1月31日～3月25日
春季特別展「馬追い街道」 3月31日～5月6日
- 横浜こども科学館**
企画展 星座たんけんクラブ 3月2日～7月8日
- 横須賀市自然・人文博物館**
特別展「山を越え、海を渡り—彼方よりはこぼれてきたもの—」
10月21日～3月25日
- 観音崎自然博物館**
植物画展「三浦半島の野の花たち」 12月9日～3月31日
「観音崎のシダ植物」 4月7日～30日
- 神奈川県立生命の星・地球博物館**
特別展「ふしぎ大陸 南極展」 2月10日～4月8日
- 上越市立水族博物館**
春季特別展「スネークヘッド展」 4月21日～5月27日
- 新潟県立上越科学館**
春の特別展 親子で遊ぶ「木とのふれあいワールド」
3月17日～4月8日
- 富山市科学文化センター**
写真展「すばらしい自然を」 3月11日～25日
天文写真展「宇宙への誘い—故萩野明氏写真集—」
3月30日～4月22日
- 岐阜市科学館**
春の特別展「天然記念物パネル展～岐阜県の天然記念物～」
3月3日～25日
- 岐阜県博物館**
特別陳列「描かれた街道～国芳・広重の中仙道～」
2月24日～3月31日
- 中津川鉱物博物館**
第8回私の展示室「恵那山の自然—自然のゆたかな山—」
3月25日～5月13日
- トヨタ博物館**
企画展「1950～'60年代のオープンカー」1月30日～4月8日
- みえこどもの城**
「数学と遊ぼう—かたちと数のワンダーランド—」

- 滋賀県立琵琶湖博物館
 ギャラリー展示「(仮称) 湖沼の伝説」 3月27日～5月6日
- 神戸市立王子動物園 動物科学資料館
 開園50周年記念特別展「ゾウの諏訪子と歩んだ50年」
 3月1日～6月30日
- 倉敷市立自然史博物館
 特別陳列「高山植物写真展」 4月1日～6月3日
- 吉備高原ニューサイエンス館
 「ラ・ピレット展」 4月20日～5月20日
- 広島市こども文化科学館
 「たのしい工作教室1年のあゆみ展」 3月16日～4月1日
 「広島県未来の夢絵画展」 4月10日～29日(予定)
- 広島市江波山気象館
 企画展(文化財指定記念事業)「ひろしまの気象台今昔～江波山の記憶とともに～」 3月17日～4月15日
- 徳島県立博物館
 日本人ペルー移住100周年記念「クントゥル・ワシ神殿の発掘—アンデス最古の黄金芸術—」展 4月6日～5月6日
- 福岡県青少年科学館
 特別展 大宇宙からのメッセージ「すばる望遠鏡～宇宙を探る新しい眼」 2月24日～4月4日
- 佐賀県立宇宙科学館
 企画展「香りを楽しむ」 3月20日～4月15日
- 長崎県立美術博物館
 第8回 長崎新美術展 3月14日～25日
- 沖縄県立博物館
 企画展「沖縄の繊維・染料植物」展～沖縄の染め織りを中心として～ 2月6日～3月4日

展示更新

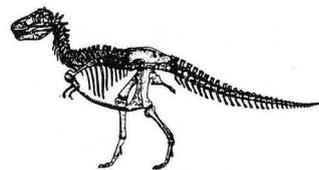
- 多摩六都科学館
 [展示室名] 宇宙の科学・生命の科学・生活の科学・地域の科学・地球の科学
 [主なコーナー(展示物)の名称] 国際宇宙ステーション、進化の

- 動物園、センサーロボット「ロッキー」、地球探検「ロクト号」
 [更新の展示面積] 2,068㎡
 [オープンの日] 平成13年1月3日
 [準備期間] 平成9年度：基礎調査
 平成10年度：基本計画
 平成11年度：基本設計・実施設計
 平成12年度(10～12月)：施工期間
 [担当業者] 設計・施工・展示：株式会社CPU
 [総工費] 展示物更新 約230,000,000円



進化の動物園

※世界の化石・
 鉱物・恐竜・化石
 人類・動物骨格
 標本及び模型の
 輸入専門業者



ティラノサウルス・REX

株式会社 **ゼネラルサイエンス**
 コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802
 TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本

地学標本(化石・鉱物・岩石)
 古生物関係模型(レプリカ)

大英博物館/恐竜復元模型

●常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)

髯東京サイエンス
 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
 TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745
 E-mail: science@oak.ocn.ne.jp

since 1974

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
 監理・運営およびコンサルティング・プロデュース

より良い「社会交流空間づくり」にむけて…

株式会社丹青社

〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)
 札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡
 URL <http://www.tanseisha.co.jp>

—全科協情報—

金沢工業大学ライブラリーセンターより、次のようなお知らせがありましたのでご案内いたします。

デュフィ作「電気の精」とその精たちの初版本展

金沢工業大学ライブラリーセンター館長 竺 覚暁

本学ライブラリーセンターは、グーデンベルクによる印刷技術発明以来出版された、科学と技術に関する初版本を体系的に蒐集した「工学の曙 (The dawn of science and technology) 文庫」を所蔵しております。この文庫に、フランスの画家、ラウル・デュフィの作品、「電気の精」のリトグラフが所蔵されております。これはデュフィが、1937年、パリで開催された「近代生活の諸芸術の博覧会」と銘打たれた、科学技術、工学の発展を記念する万国博覧会展示の中心として、出展されたパヴィリオン「電気館」に巨大な壁画として描かれたものです。デュフィは、これを後世に残すべく10枚組みのリトグラフにして、35セットのみ制作しました。日本には2セットのみ現存し、当館所蔵のものはそのひとつであります。

この「電気の精」はデュフィが、電気技術を中心とする科学技術の発展を、古代から現代まで辿って画像化したものですが、そのなかにこの発展を築いた著名な108名の科学技術者たちの群像が描かれています。「工学の曙」文庫はそのうち50名の画期的業績が初めて公表された初版本を所蔵しております。そこで、このリトグラフ、「電気の精」と貴重な初版本を組み合わせた表記の展示を企画し、昨年本学において二回公開展示を行いました。観客の方々からは大変興味深い展示であったとの好評を寄せて戴いております。

この展示にご関心をお持ちの館は、当館(☎076-246-2112:岡田)までご照会を戴ければ、展示貸出等について検討をいたします。

めざすのは
「小宇宙」の実現です。

NOMURA

株式会社 乃村工藝社

本社/東京都港区芝浦4-6-4 〒108-8565 電話03-3455-1171代
ホームページ <http://www.nomurakougei.co.jp>

ディスプレイおよび建築の調査・コンサルティング・
企画・設計・デザイン・プロデュース・演出・制作施工



INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT

ONY KOBO CO.,LTD.

東京都千代田区神田神保町2-7-3シグマ神保町4階
TEL(03)3221-1102代 FAX(03)3221-1185



動物園/水族館/博物館
企画・設計・施工



COLORATA.

ミュージアムグッズの企画・制作・販売・輸入
カロラータ株式会社

本社・企画室

〒111-0053 東京都台東区浅草橋4-6-8 西澤ビル
TEL.03-3865-8110 FAX.03-3864-4049

営業部・商品管理部

〒136-0072 東京都江東区大島2-13-11
TEL.03-3684 8311 FAX.03-3864-8310

全科協ニュース編集委員会

NHK放送博物館 チーフディレクター 河野光子

滋賀県立琵琶湖博物館 企画調整課長 高橋啓一

ミュージアムパーク茨城県自然史博物館

資料課長 都賀和男

国立科学博物館 普及部 普及課長 武田良正

国立科学博物館 普及部 普及課専門職 原田紀子

全科協事務局

国立科学博物館普及部普及課 森田 淳 鈴木千絵

Tel.03-5814-9857・9858 Fax.03-5814-9898

発行日 平成13年3月1日

発行 全国科学博物館協議会©

〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 島崎印刷株式会社